



とよはし市電を愛する会 顧問

伊奈彦定

Hikosada INA

豊橋市民のまごころにある

「市電のある風景」

とよはし市電を愛する会の伊奈彦定顧問は画家でもあり、路面電車のある風景をライフワークとして、40年以上にわたり、豊橋の風物詩を描き続けている。

作品を通して豊橋のまちと生活、文化を見続けてきた伊奈顧問に「市電のある風景」への思いを伺う。

文●茶木 環／撮影●織本知之

至近距離で走ることに感動

路面電車のある風景の絵画制作をライフワークとする伊奈彦定とよはし市電を愛する会顧問は昭和10年生まれ。東京・目白で育ち、幼少の頃は当時、省線と呼ばれたJR山手線が大好きで柵越しによく眺めに行った。小学校2年の時に、国鉄勤めだった父親が出征したことを機に、母親の郷里である豊橋に疎開した。

「初めは東京の友人たちと離れるのがとても嫌でした。でも、豊橋に着いたら、何とまちの中に電車が走っている。しかも路面電車はスピードも遅くてのんびりした大らかな印象で、間近で見ることができた。こんなまちだったら住んでもいいなと幼心に思っただけです」

軍都・豊橋は幾度も空襲に遭い、中心市街地から郊外へ疎開した。昭和20年6月の豊橋大空襲では遠くに中心市街地が真っ赤に燃える光景を見た。

「数カ月経って中心市街地に來たら、焼け野原で変わり果てたまちの中を路面電車が走っている。何もないまちを向こうからやってくる電車の姿は感動的で、すごいなと思いました」

昭和32年に愛知学芸大学（現・愛知教育大学）美術教室卒業後、豊橋市内で教職に就いた。40代で教頭・校長となったが、当時は核家族化や家庭内暴力、登校拒否など、子どもたちを取り巻く家庭環境や問題が顕著になりつつある時代だった。

「子どもたち、保護者、先生が共通の広場で語り合うことができないかと考えて、市電を通して絵と文で豊橋の郷土史を作成することを思いついたんです。郷土愛の育成です。主軸は自分が感動したあの路面電車にしようと思いました」

市民の生活に乗せて走る電車

郷土史をつくるに当たって、かつて

特集：まちに溶け込みまちを支える路面電車

〔市電、と呼ばれて90年―豊橋鉄道市内線の魅力〕



豊橋市民のころにある「市電のある風景」。

の記憶から路面電車の絵を少しずつ描き出したら、どんな作業に没頭していった。学校の職員室では同僚の先生たちも「面白い」「そういえば昔はこうだった」と関心を持って語るようになった。

「職員室では路面電車の思い出話で盛り上がることも頻繁で、それでは絵を描くだけではなく、電車についてもっとよく調べてみようと思いました。豊橋鉄道に行つて、古い資料を見せてもらったりもしましたね。」

学校が休みの日曜日には、市電沿線で暮らす人々に話を聞いて歩きました。最初は見知らぬ私と話をするのが乗り気ではなかった人も、路面電車のことになると不思議とすごく乗って、いろいろな話を聞かせてくれるんです」

●証言1 日本で最初に路面電車が開業したのは京都で明治28年。豊橋の路面電車は全国的に見るとそれほど早い方ではないが、それだけにモダンな車両が導入された。開業当初は周辺の人々が弁当持参で、家族で見物に出かけた。

●証言2 豊橋の地は空っ風が吹くので女の人の髪形が乱れてしまう。そこで、路面電車の車内に小さな鏡が取り付けられるという粋な計らいがあった。

●証言3 沿線に高等女学校と旧制中学校があったが、戦前・戦中はかなり規律が厳しく、原則路面電車を利用してはいけないが、雨の日だけはいいとされていた。主に風紀上の問題で、男子と乗り合わせると、話をするのはもちろん禁止で、間に教員が立つようになつていった。そのほかにも女学生たちは禁じられていたパンの買い食い、たたくて、電車の中でこっそり食べるのが楽しくて仕方がなかった。

●証言4 花街が終点なので若い衆は元氣よく乗車したが、大金を使い果たし、帰路の車内ではうって変わってしょんぼりした姿だった。

●証言5 出征の日、万感の思いで町内の人々と別れを告げ、路面電車であまりできなかつたのか、急カーブで車両が軌道を曲がる時、大きなきしむ音がまちの中に響いた。

●証言6 戦時中はメンテナン스가あまりできなかったのか、急カーブで車両が軌道を曲がる時、大きなきしむ音がまちの中に響いた。

●証言7 沿線の家庭では、母親が夜なべ仕事をして終電が通り過ぎたら仕事を終えるという人、始発電車の音を目覚まし時計代わりに起きるという人も多かった。

●証言8 (元運転士の話) 乗客に背を向けて運転しているが、顔を直接見なくても、声や車内の気配で乗客の顔が見えるようだった。それぐらい乗客が近い存在だった。

「話を聞いていると、まるで絵巻物のように人々の生活が浮かび上がります。路面電車は単なる移動手段ではなく、市民の生活を乗せて走っていることが2年間の取材でよく分かりました」

市電のある風景を守る

路面電車を軸にした豊橋市民の歴史は伊奈顧問の絵と文で、豊橋文化協会(現・豊橋文化振興財団)の広報誌『豊橋文化』にシリーズで連載されることになった。それがきっかけで昭和62年に画集『市電のある風景』が出版される運びとなった。

画集は大反響を呼び、現在第3集まで出版されている。また、とよはし市電を愛する会では活動基金づくりとPRを目的に、伊奈顧問の作品を使用した絵画カレンダー『市電のある風景』を毎年発行している。

「私のスケッチは路面電車だけではなく、人物を含めて風景を描く。古く味わい深い電車と、その電車が走るまち、そのまちでの人々の生活や思いが、いい相乗効果を出しているのではないかと思います。」

とよはし市電を愛する会の活動で全

国各地の路面電車関係者とのネットワークが広がり、学ばせていただくことも多い。また、豊橋交響楽団の顧問でもある関係でヨーロッパの都市を訪ねることもあり、フリータイムにはそのまちを走る路面電車をスケッチしてきました。クラシック音楽の盛んなまちには路面電車が走っています。ヨーロッパの都市の路面電車はシステムも素晴らしい。特に乗降時間を短縮できる信用乗車が成り立っていることがすごいと思います。豊橋でも全部ではなくてもできることから取り入れ、目指すことはできそうです」

路面電車の存続には市民・行政・交通事業者の連携が不可欠だが、3者が志を同じ方向に向けるためには、「夢」と「理想」が必要だと言う。

「『こんな理想的なコンパクトシティにしたい』と率直に語り合える人的ネットワークが重要です。最初に理想形をイメージして、それを一歩ずつ現実の形にしていこう。そういう夢や構想を行政、事業者、市民のリーダーが持つこと。本当の軌道を敷くのは人間の心の中なんです。鉄道工学的な知識や考えももちろん重要ですが、その一方で未来への夢とロマンを持つ。この両輪で路面電車を走らせてほしいと願っています」



第3集まで刊行されている『市電のある風景』。